



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	講演記録 「授業研究」について
Author(s)	ルイス, キャサリン
Citation	学芸大数学教育研究(16): 1-10
Issue Date	2004-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/39673">http://hdl.handle.net/2309/39673</a>
Publisher	
Rights	

## 講演記録

## 「授業研究」について

キャサリン・ルイス (Catherine Lewis), ミルズ大学

ルイス先生：フォーマルな形での発表を用意していませんが、10分ぐらいお話した後で皆さんとディスカッションができればいいと思っております。

## (1) 「授業研究」を研究するきっかけ

私がどうして「研究授業」に興味を持ったかということから話したいと思います。

10年前、名古屋の小学校を訪問しているときに、子どもが学校に対して愛着をもってると感じました。国際研究を見ていると、日本の小学生は非常に学校というところが好きです。それは、やはり学級作りとか、子どものニーズとかに答える学校を作っているからだと思います。一方、アメリカでは、子どもたちを競争させたり、いいことをするとごほうびをもらって、悪いことをすると罰したりします。そういう行動主義で動いている小学校が多いのです。だから、アメリカの子どもは学校嫌いになりやすいですね。また、学習の能力別でクラスを分けます。私も小さい時に辛い経験をしました。小学校1年生の時、20人ぐらいのクラスが、よく読める子と読めない子といったように3つぐらいのグループに分けられました。私は一番読めないクラスに入ったんです。後のグループは、みんな分厚いカバーの着いた本を読んでいたのに、私のグループだけは普通の紙の着いた本でした。みんなにばかにされてすごく嫌な経験をしました。そういう能力別とか、ごほうびや罰で

子どもを動かすのではなくて、クラスの日標だとか、個人の反省などによって学級作りをする日本の教育は、非常におもしろいなと思ったのです。

その学級作りとか子どもの学校に対する愛着とかを主に研究していたときに、全然関係ないことですが、身の回りのいろんなところに、てこや振り子があるんだなと初めて気が付きました。よくそれまで気がつかなかったなと思うんですけど。例えば、スーツケースを引っ張るときに、どこに自分の重いかばんをつけたらいいかということが、てこの問題だって初めて気がついたんですよ。なぜこれに気がついたかかというと、私が最近見た日本の小学校の理科の授業がきっかけになっていたんです。その授業で、毎日の生活のいろいろなところに、理科があることに初めて気が付きました。これは、アメリカの理科教育はお粗末なもので、日本の小学校の理科教育がどんなにいいものを語っていると思いました。そこで、いろんな日本の小学校の先生に、そういうてこや振り子の教え方をどこで学んだのかと質問したら、「研究授業」で学んだという答えが、いろんなところで返ってきました。そこで、その「研究授業」をしてくださいと私が頼んだら、40ヶ所ぐらいのところで、いろんな「研究授業」、主に理科の「研究授業」を見せていただきました。そこから1つの研究が始まったんです。

それで、日本の小学校の理科教育は、例え

ば週2時間だけの教育というのじゃなくて、子どもたちが起きている時間すべて理科を学んでいるというか、勉強していると考えればいいのではと、私は解釈したんです。ですから、算数教育も同じで、毎日の生活の中で算数を見つけようということを活かした教育をしていて、それが効率的なものだと思います。そこから本格的に算数教育とか理科教育を勉強させていただきたいと思って、10年前位から研究授業がある時期を狙ってよく日本に来ているんです。社会教育とか国語教育というのも、非常に面白い教育の仕方ですけれども、やっぱり、理科教育と算数教育は日本の方が圧倒的に優れていると思います。

## (2) 「授業研究」をめぐるアメリカの現状

「研究授業」を見て、「研究授業」がアメリカで非常に役に立つものと思ったんですが、それをどういうふうにアメリカ人に紹介したらいいかと悩みました。それで幾つか論文で紹介しました。「研究授業」がすばらしいものだと認めてくださったんですが、アメリカではできないことだろうと言う官僚が多いです。どうしてできないかという、アメリカには共通のカリキュラムがないことと、現場の教師間の競争が激しい学校が多いために、他の教師に自分の授業の秘密をばれたくないと言って嫌がられることが予想されたからです。

「研究授業」についての論文は1996年ぐらいからアメリカで書いていたんですけども、1999年に英語で“The Teaching Gap”っていう本が出版されました。その中には、TIMSSの結果が載っていて、中学生のデータですが、アメリカの子どもは日本の子どもに比べて算数、数学が弱いという実態が書かれていたん

です。

また、その本には、“The Lesson Study”という名前で「授業研究」のことも紹介されていました。「授業研究」の紹介の内容は、その本を書いたアメリカの Stigler と Hiebert という2人の研究成果によるものではなくて、吉田誠先生という Stigler 先生から指導を受けた方の研究成果によるものです。

吉田先生は、ずっと広島のある小学校の算数の「授業研究」をエスノグラフィックな方法で研究していました。それをたまたま知った Stigler 先生が、ここに日本の算数、数学教育が常に向上している秘密があるのではないかと分かっている、「授業研究」をかなり細かいところまで紹介してくださったんですね。その本によって、アメリカ人の「授業研究」に対する反応が本当に変わって、「授業研究」しようという方向に態度が変わっていきました。1999年は1ヶ所もアメリカで「授業研究」をしているところがなかったのに、今は、Web上の最近の統計で28州の58学区で1500人以上が「授業研究」に参加している。Webサイトの記録だけでそれぐらいいますから、多分、少なくともその2倍ぐらいはいるのではないかと思います。ですから「授業研究」も1つの文化になっている。だからこそ、研究者として危なさも感じます。つまり、1つの流行だけで終わってしまわないかということです。本当の「授業研究」が作られるかどうかは、今、アメリカ人が面している課題ですね。これまでのアメリカの改革の歴史を見ると、パッと新しい改革が出て、パッとまたなくなるというそういう例が10回ぐらい繰り返されています。“Lesson Study”，「授業研究」はそういう例にならないように、どういう研究を

したらいいかと本当に頭を悩ませています。

このへんでちょっとディスカッションに入りたいと思います。研究者としていろいろやってみて、今、何が大事かと考えると、やっぱり日本の現場の先生と交流をして、「授業研究」をつくることだと思うんですね。私に関わっているサンマテオという学校が北カリフォルニアにあるんですけれども、3年前からいろいろ日本の現場の先生と密接な関係を持って、高橋昭彦先生を中心に3回か4回呼んで、授業をしていただいたんです。そのときに、例えば、日本の先生方に「研究授業」を見る時のノートの書き方を教えていただいて、どういうところが書けていたか、もっとどういうことを書けるとよいかとか、とにかくいろいろ教わりました。現場の先生同士のいい交流ができました。そういう現場の先生の交流というところから、アメリカの「授業研究」のいい事例、深く「授業研究」を行っている事例を作れば、アメリカ人にもできないものではないと、アメリカ人に伝えることができると思うんです。

## ディスカッション

### I. 「授業研究」と「研究授業」

藤井：では、どこから始めましょうか。まず、現場の先生がおられるので、「研究授業」に焦点を当てて、初めて「研究授業」をした経験だとか、今まで何回ぐらいやってきたかとか、「研究授業」をやることによって教師としてどう変わるのかとか、そのあたりの率直な思いを言ってもらいましょうか。

高橋恵美子先生：その前に質問してよろしいでしょうか。「研究授業」と「授業研究」とい

うのは区別なさっているのでしょうか。

清水：私は「研究授業」という言葉を使いました。授業研究会というイベント自体を「授業研究」と呼ぶこともあるし、「授業研究」というと、例えば、ビデオテープを100本集めて授業の分析をするという意味での「授業研究」もありますよね。そのへんの言葉遣いは微妙ですけど。私はある仮説を持って授業をして、その後の研究討議会も含めて、そういうものを「研究授業」とイメージしてこの言葉を使ったんです。

藤井：概念的には「授業研究」を広く取って、「授業研究」の中に「研究授業」を位置づける。授業を研究するから「授業研究」。だから、指導案だけを見て、指導案で授業を研究することも入る。「研究授業」は、実際の授業が行われて、その後で質疑応答があってという一連の動きが必ず入っているものなんです。

清水：さっきの“Teaching gap”では、湊三郎先生が「授業研究」という言葉が使われたですよね。“Teaching gap”の副題に。

高橋先生：じゃあ、(キャサリン)先生は「授業研究」という言葉を使っているのですか。

ルイス先生：両方とも使っています。

高橋先生：「授業研究」は英語で何というのですか。

ルイス先生：“Lesson Study”と翻訳しています。

高橋先生：「研究授業」は？

ルイス先生：“Research lesson”です。そこが非常にまずい点だと思うのですが、私が先に“Research lesson”と「研究授業」のことを翻訳して、その後、「授業研究」の翻訳として“Lesson Study”がよく知られるようになってきました。“Lesson Study”がちょっとまずい

と思うところは、“lesson”は常に1つの授業を指します。日本の場合は、「授業」といえば、1つの授業でも幾つかの授業でも言えますよね。英語では“instruction”や“lessons”にあたります。でも、英語だと“lesson”はあくまで1つの授業のことで、ですから“Lesson Study”という、1つの授業しか見ないととられやすいですね。あと、“study”を直訳しますと「覚える」に近い。例えば、言葉のつづりを覚える。だから“research”の方が意味は近いと思います。

藤井：だから、「研究授業」というと授業そのものだけではなくて、その前の指導案の検討から始まって、大きな研究会だと、隣のクラスで授業をしてみて、その後本番があって、討議会があって、飲み会があって、そういうものも含めて話をすることもある。「研究授業」によっていい経験になったというのは、授業だけでなく、その前後も含みますから。「授業研究」というと、さらにもうちょっと広いですよ。

ルイス先生：私は現場で見ていたので、「研究授業」という言葉を使っていましたけども、逆に、アメリカでは「授業研究」という言葉が流行りましたから、今はそれに従っています。

藤井：現場の先生からすると、「研究授業」というと、いつもと違うことをやらないといけない。「研究授業」があることで、それなりに緊張して準備をしますよね。だけど、「授業研究」というと、もう少し肩の力が抜けるし、「授業研究」のイメージは一般的な感じがしますよね。

清水：そのへんを先生方がどう思っているかを。

高橋先生：私、(藤井)先生が持っているイメ

ージとちょっと違う感じがします。教材研究は、教材を研究するものだし、授業そのものを研究するのが「授業研究」。広いというよりは・・・。

藤井：「授業研究」を「研究授業」も含めて考えると、「研究授業」というのはかなり特殊な響きを持ちますね。

## II. 「授業研究」と「学級作り」の関係

笠井健一先生：少し話が変わりますが、最初のお話の中で、学級作りに関心があって、それで「研究授業」を、という話だったのですが、その「授業研究」と学級作りはどのように整合的というか、リンクしているのかを質問したいのですが。

ルイス先生：うまく説明できるか分かりませんが、1つは100人ぐらいの日本の教師をインタビューして、自分の「授業研究」での経験は何かという質問をしました。例えば、よく覚えているのは、7年ぐらい教えている先生で、1年目のときにもう1つの1年生のクラスの「研究授業」がありまして、自分のクラスはものすごく静かで、なんか怖い雰囲気があるのに、そのクラスは子どもが活発に質問に答えていて、リラックスしている感じだったと反省したそうです。でも、そこから、もう1つのクラスの先生に、子どもが活発に話すことができるようにするためにどういう方法を取っていたのかを聞き、そこから本当に勉強するという気持ちが出たそうです。

「研究授業」で見るのは授業だけじゃなくて、今までの結果をすべて見られるので怖いのだと思います。だから、教室を開きたくない。例えば、今までのノートの取り方だとか、集団の協力の仕方だとか。でも、逆にいいも

のを見たときに、それまでの教室での営みを反省できます。だから、アメリカでも結構算数の授業だけじゃなくて、学級作りなどの本当に子どもの生活指導における根本的なところで、今まで問題にしなかったことを問題にした。例えば、どうしてごほうびによって子どもを動かすのかとかです。

もう1つあるのですが、“Teaching Gap”と同じStigler氏が書いた“Learning gap”という本で、算数、数学を教えるときの日本の技術を紹介していますよね。例えば、 $1/2$ と $1/3$ の分数を足す最初の授業で、子どもが自由に考える問題解決的な授業ですけれども、半分と $1/3$ を足したときに、どういう足し方をしたらいいかという質問に対して、半分と $1/3$ を足して $2/5$ という間違いをした子どもが出てきました。その間違いは、アメリカでは非常に多く見られるもので、アメリカの教師もその間違いを出させて議論するというのは非常にいいことだとビデオテープを見て、納得していました。ただ、日本だとみんなで間違えて、みんなで学ぼうという、競争相手としてじゃなくて、みんなで協力して学ぼうといういい雰囲気があるんですよね。アメリカのような、間違えて嫌な経験をするという競争的な雰囲気じゃなくて。だから、いつもStigler先生と、数学を教える技術だけを紹介していいのかということに疑問を持つんです。ですから、「授業研究」を紹介するときには、数学の教え方だけでなく、そのベースとなっている人間関係も紹介する必要がありますね。

笠井先生：問題解決的な授業のベースとして、学級作りがあると考えてよろしいでしょうか。

ルイス先生：アメリカで問題解決的な学習が広がらなかった原因は、「授業研究」の制度が

ないことと、学級作りがベースになかったことだと思います。ある程度、間違えてもいい雰囲気を作らないと、普通に授業をしようとしても、あまり子どもは活発に参加しないですからね。

小寺隆幸先生：日本の「授業研究」と学級作りの関係についての歴史的な背景は、深いものがありますよね。戦前からの生活綴方運動、要するに、教育が子どもたちの生活に適したいろいろな考えを引き出しながら授業や学級を作っていくという伝統的な考えが、今も残っていますよね。

また、日本の場合は、フォーマルな「研究授業」とインフォーマルな「研究授業」の両方ありますよね。例えば、1つの「授業研究」にしても、授業を見せる、その後で1、2時間研究協議を行うだけで完結するのではなくて、むしろ、授業を行う前に先生方のグループやサークルでどういう教材で、どうやって指導するかと議論する。そして、研究協議会を終わった後にサークルの中でもう1回見直す。その中で、一人一人の子どもの反応を議論する。そうすると、授業自体はもちろん、子どもの普段の生活の様子までも含めて議論することになります。だから、本当に大事なものは、授業内容だけでなく、普段の子どもの様子についても教師間でフランクに情報交換できる環境を作ることなんですよ。

ルイス先生：そうですね。アメリカで「授業研究」が十分に浸透しないのは、多くの人が、「授業研究」がただ授業案をよりいいものにするためのものだと考えているからです。子どもや子どもの生活を、授業を通して見ることに対する理解は、まだないです。それをアメリカ人に紹介して、「授業研究」が、

もちろん算数を上手に教えるためのものであると同時に、子どもを育てる場でもあることを知って欲しいですね。だから、「授業研究」は、算数をどう教えるかということだけではなく、どういう子どもを育てたいかということから始めることも、アメリカの先生に伝えたいですね。次世代の人間を育てるという目標と「授業研究」が結び付くことを知ると、アメリカの先生も喜んで受け入れると思います。

松田恵里先生：今までの先生方はベテランの先生で、何年も「授業研究」をしてきた方々だと思います。私は今2年目です。今は副担任で、授業を常にすることは無いのですが、たまに単元で授業をやらせてもらうことがあります。そこでは、こういう教材で、こういう授業をすればこういう風に子どもが育つだろうと思って授業をするのですが、やっぱり子どもが育ってきた環境があって、うまくいかないんです。教科が先というか、教えたいたいのがしっかりしていれば子どももそれについてくると思っていましたが、やっぱり学級作りが、先ず根底にあることをすごい実感しました。授業が終わった後に先生方から頂く指導でも、算数の授業内容よりも、生活面、学級作りの内容が中心です。それまで、教科のことばかり頭にあったので、学級作りのことをもっと考えなくてはいけないなと反省しました。

ルイス先生：おもしろいですね。アメリカの若い先生も同じことをおっしゃっていました。

また、日本の多くの教師に「授業研究」で一番役立つことは何かという質問をしたところ、恐らく一番多かった返事は、子どもを見る目を養うことができるということでした。

金井寛文先生：私は教員4年目ですが、大学院では授業前の準備にどういうことをしなくてはならないかということ学んできました。

それで、教員1年目のときに、授業内容の準備以上に、授業の始めは礼をした方がいいとか、正装の方がいいといった授業を行う上での基本的なことを、周りの先生方から教わりました。また、周りの先生方を見ていく中で、子どもを一人一人見ることが出来る先生は、生活指導も上手にできるということも学びました。その1年目の経験はとても印象的に残ってしまって、1年目の経験は本当に貴重だなと思っています。

中野博之先生：私はもう20年になりますが、最初16年間は公立の小学校に勤めていました。そこでの校内研究会は、算数を通して学級をどういう風につくっていくかということに目的がありました。つまり、いいクラスを作るために、算数を通して授業を校内で研究しましょうという方向に主眼が置かれていました。ところが、附属小学校に来ると、学級作りは当たり前で、いい指導案を作ればいい授業をすることに主眼が置かれます。ですから、附属小学校に来る先生方の中には、学級作りで悩むことを通らざるにきて、今さらながら子どもを静かにできない方だとか、理屈は言うけれども、授業はどうなのという方がいることも事実です。だから、バランスというか、両方大事なんです。やっぱり学級作りが根底になれば授業は成り立たないし、だからといって学級作りだけでなく、教材研究やいい指導案はどうやって作るのかということも考えなくてはならない。「授業研究」の目的は、教員経験や、公立や附属といった自分の置かれている立場によっても変わってくると

思います。

あと、もう1つは、先輩の先生というのはすごく大事です。特に、身をもって教えてくれる先輩ですね。私の先輩は、私が「授業研究」をすると言うと、指導案を見てくれたり、私の授業案を基に授業をやってみせてくれたりします。そういう日々学べる環境というか、「授業研究」じゃないところで多くを学ぶことができる環境が大切かなと思います。そのためには、日頃から先生たちが一緒に頑張っていこうという気持ちを持つことが必要だと思います。

ルイス先生：それも非常に面白いです。アメリカでも、「授業研究」が先生同士のつながりを強くするのではという仮説を持っています。互いの授業を見せ合うことで、先生同士の会話が変わってくることを1つの結果として望んでいます。

杉田博之先生：今、学級作りという言葉が出て来ましたね。私は、私立の学校で教科担任をしています。ですので、毎年算数の授業を何クラスか持ちます。担任の先生は別にいますけど、毎日1時間ずつぐらいそのクラスを受け持つわけです。その中で、非常に学級経営が上手な先生で、子どももしつけられているすばらしいクラスだと言われているクラスに行っても、算数の授業がすごくやりにくいケースがあります。それはなぜかという、そのクラスの算数の授業に対する価値観が、自分の前に授業をしていた先生の価値観で、自分と違っていた時に全然うまくいかないのです。例えば、速く計算ができることに価値があるとか、間違わないことに価値があるといったことです。だけど、学級作りはうまくいっている。だから、算数の授業と学級作

りは引き離して考える必要があると思います。

「教室文化」という言葉がありますけど、授業の45分の中に流れている価値観、そういう教室文化を作ることが大事です。そして、それに教材論やカリキュラム論みたいなものが融合して、初めてすばらしい授業ができるのであって、その教室文化をどうやって作るかということが非常に難しい点であり、それを研究していかななくてはいけないと思います。

逆に質問ですが、アメリカでは、教室文化といった、文化や価値観をどういう風に指導しているのかということです。つまり、教材研究やカリキュラムといった話とは別に行われているのか、また、違う形で指導されているのかということなのですが。

ルイス先生：（教室文化について）研究している人は何人かいると思います。しかし、それが教師教育に活かしているかどうかは疑問です。先生はとても面白い指摘をしてくださったと思います。学級作り、例えば間違ってもいいだとか、みんなで協力し合うといったことを、英語ではよく“mathematical rules”, “mathematical classroom rules”と言います。

清水：「規範」と言いますね。目に見えない暗黙のルール。

ルイス先生：そうですね。

中野先生：違うものの共通点を見ていこうだとか、一般的なものを求めていこうといった算数や数学で価値ある見方が、どんなに学級経営がよくても、先生に力がないと、子どもにそういった数学的な態度が育っていかないということですよ。

ルイス先生：そういうことですね。日本の小学校の授業のすばらしい点は、やっぱりその規範にあると思います。例えば、自分の既に



知っている知識を用いて、子どもが主体的に問題を解決しようとするという。アメリカの学校だと教室によって本当に違います。速く計算すればよいとか、とにかく間違いを避けるとか、いろいろあります。ですから、子どもたちも毎年学級が変わる度に、全く異なる環境に置かれて、算数、数学が本当に何かということイメージ化できないでいます。学校でそういう一貫した結束がないのは、子どもにとって問題ですね。そういう教師同士の結束も、やっぱり「授業研究」を通して作っていくものだと思います。

### Ⅲ. アメリカと日本における「授業研究」に関する問題点

小寺先生：アメリカは、どちらかといえば、個に応じた、一人一人が自分で解決する授業形態だと思うんです。それに対して、日本は伝統的に一斉授業の形態で、先生が問題を出して、みんなでお互いに議論しながら、教室で1つの方向に向かっていくことが中心です。だから、アメリカのどちらかといえば個人的な指導中心のクラスと日本のクラスとは根本的に違うので、「授業研究」をアメリカに直接持っていても、なかなか理解されないのは当然だと思います。

逆に、今、日本では個に応じた指導が重視されています。学級を解体した少人数指導などです。アメリカでは少人数の授業が見直され、いろんな子がいて、みんなで授業を作ることの方がいいのではないかという流れになっているようです。日本は、それに逆行している感じを受けて非常に心配です。

ルイス先生：本当に心配ですね。日本の、特に小学校中学校の算数と理科の授業は、世界

中で非常に高く評価されているのに、どうしてもそれが破壊されているのかが不思議ですね。大学教育とか高校教育は、確かに問題があると思います。それで、その問題に対する改革モデルに、アメリカで既にいけない、失敗だと認められているものを採用している。どうして、日本のすばらしい小学校教育をベースにしないのが不思議です。ただ、本当に自分の国のいいところをあまりにも分かっていないという実態もありますよね。

中野先生：日本人はだめという全部だめにしてしまう。だから、悪いところだけでなく、いいところもだめにしてしまう。それが、返って計算練習ばかりといったような、問題解決型の授業よりも楽な方、楽な方へと行ってしまふ。

高橋先生：「研究授業」をするよさは、校内ですと、同じ学年の先生と算数の授業ならば算数の話題で話したり、お互いに授業を見せ合ったりする機会がすごく増えるんです。そういう意味で、算数が教師間で広がるよさがあると思います。一方で、自分の価値観とずれた価値観をお持ちの先生と議論する事があると、そのギャップに戸惑ってしまい、うまくいかない場合もあります。そういう難しさもありますよね。

「授業研究」という意味で考えると、確かに「授業研究」のために事前授業をしたり、指導案を練ったり、調査もしたりします。その一方で、「授業研究」のときだけ、授業を研究するのではなくて、常日頃から、自分の授業を研究しようという意識を持つことが大事だと思います。

藤井：今は、アメリカで、「研究授業」、「授業研究」が、高い関心のあるときだと思いま

す。このままうまくいってほしいです。

日本ではわりと短期間で結果を出そうとする風潮が強いです。少人数を主張するのもそうですね。例えば、一斉授業でずっと黙っていた子が、一単元や一学期で通して見ると、それなりに頑張っていたりする。この時間だけ見るとこの子は何もしていないとすぐ批判する。だから、その子に対応するように少しグループを小さくしてやればいいじゃないかとすぐに言われる。トータルできちっとやればいいってことをちゃんと言い返せない風潮があって、それが一番問題です。学級作りには時間がかかります。だから、その視点に立って、「授業研究」、「研究授業」を行っていく必要がある。すぐにはうまくいかないです。そういうメッセージも大事じゃないかと思えます。

清水：例えば、アメリカの先生は2年生あるいは1年生の先生という、1人の先生が15年間2年生を教えているというような学校もありますよね。日本の場合は、学年がどんどん変わりますからカリキュラムを縦にある程度理解している。そういうカリキュラムを縦に見られることが、もしかしたら、「授業研究」の支えになっているのかなとふと思いました。だから、日本の先生は、4年生の「研究授業」があれば、自分も4年生を持つかもしれないので、みんな見に行きますよね。しかし、2年生しかもたない先生は、4年生の「研究授業」にあまり興味を持たない可能性もありますよね。そういうシステムの違いが背後にあって、そういういろいろな観点から比較してみると面白いかなと思います。

藤井：もう少し大きくいうと、日本の高校には「研究授業」の伝統がないです。中学校も

少ない。小学校は自分の授業を誰かに見てもらって、批判してもらうことには慣れていますが、中学校はちょっと厳しい。

小寺先生：私が市で「授業研究」をやりましようと呼びかけても誰もいなくて、自分でするしかないという状況です。自分がやって、その意義を示して、他の先生にやってもらうしかないです。

藤井：高校になるとほとんどないです。今まで2回ぐらいしか見たことがない。それで、指導案も問題集のコピーが廊下においてあって、“今日はこの問題集のここここをやります”と書いて解くだけです。だから、アメリカともし比較するとしたら、日本の高校の先生にどう「研究授業」を導入するかという日本の抱えている問題が、アメリカの抱えている問題とほぼ同じです。日本の高校には、なかなか入っていきません。一方、アメリカの高校では、おもしろい授業をたくさんしているし、わりとオープンですね。逆に、アメリカの小学校はオープンではないので、「授業研究」が入りにくい。それと日本の高校が同じで、同じ問題をどう解決するかという点で、面白い比較文化研究になると思います。

ルイス先生：最近、マサチューセッツ州の方で、高校と中学校のよい「授業研究」が行われました。本当に先生方が熱心になさっていました。

藤井：高校にすぐ波及するというのがアメリカですね。日本では、高校は難しい。

杉田先生：大学教育に問題があると思うのですが、小学校の教員になるには、国立大学の教育学部を出る必要があって、私立大学もありますけど、そういうところは大学の中でも

教育に対するウェイトは高いと思うんです。中学、高校となると、かなり教育学部以外の出身者が多くなる。そうすると、片手間に教科教育を教えている先生が多くなってくのではないかと思うんです。小学校でも国立大学の教育学部を出ている先生は、わりと授業研究会に関心を持っています。その一方で、私立大学を出た先生は、そういう文化がない場合もあります。だから、そういう意味で、国立大学の教育学部の先生には、頑張ってもらわなくちゃいけないなと思います。

藤井：それでは時間ですので、この辺で。今日はどうもありがとうございました。

---

講演日：2003年8月7日(木)

会場：東京学芸大学自然館 数学教育実習室

参加者：キャサリン・ルイス（ミルズ大学）

藤井斉亮（東京学芸大学）

清水美憲（東京学芸大学）

杉田博之（成城学園初等部）

小寺隆幸（多摩市立和田中学校）

中野博之（東京学芸大学附属世田谷  
小学校）

笠井健一（日野市立日野第七小学校）

高橋恵美子（足立区立千寿桜小学校）

金井寛文（品川区立城南中学校）

松田恵里（早稲田実業学校初等部）

他 東京学芸大学大学院生

東京学芸大学教育学部4年生

記録者：小岩 大